

Ⅲ 今年度の研究実践

授業づくりグループ

- ①生きる力を育む授業づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
～作業学習の栽培活動を通して「食」との関連の中で学ぶ～
- ②自分の感性に気づき認められるように・・・・・・・・・・・・ 102
- ③散歩を通した授業づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108
～豊かなかわりを願って～
- ④生徒の生活を広げるグループ学習づくり・・・・・・・・・・・・ 116
～子と親のニーズを大切にしながら～

生きる力を育む授業づくり

～作業学習の栽培活動を通して「食」との関連の中で学ぶ～

橋本直紀

研究協力者：武居 渡（金沢大学教育学部准教授）

1. 研究の概要

- ・「食」をキーワードに「栽培」「自然」「健康」「安全」などを観点とする実践研究を行う。
- ・作業学習の活動と「食」とを関連づけて授業を行う。
- ・生徒の「生きる力」を育むための手だてや活動および内容を探る。

2. 昨年度までの研究のながれ

年度	授業形態・対象	授業内容・手立て
15	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部「作業学習」の栽培・木工班で生徒7名 ・高等部2年生の「生活」で生徒9名 	<ul style="list-style-type: none"> ・栽培と調理的内容を結び付けた学習活動として「大豆」を題材とし、「とうふ作り」の授業を行った。
16	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部1年生の「生活」で生徒8名 <p>注：この年度は「作業学習」の栽培班は無し</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小麦を題材として、自ら体験する機会を重視し、「食」を種まきや栽培から始まる加工や調理までの「つくる」という一連の流れの中に位置づけて授業を行った。
17	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部「作業学習」の栽培・クラブト班で生徒7名 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の料理に関連した野菜を栽培し、試食の機会を設けることで、野菜をより身近に感じさせるとともに、栽培作業や販売活動への意識を高める授業を行った。
18	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部「作業学習」の栽培・クラブト班で生徒6名 ・生徒6名中3名は昨年度より継続 	<ul style="list-style-type: none"> ・野菜の栽培活動と「食」とを関連づけて授業を行った。 ・目標をもち、意識して活動に臨めるように自己評価票の「がんばりカード」を導入して授業を行った。

3. 今年度の実践

今年度も昨年度と同様、高等部の「作業学習」の栽培・クラブト班で野菜を中心とした栽培活動と販売活動、そして試食の授業を行った。特に今年度は昨年度までの活動内容を踏襲することで授業実践を確立しようとした。また、引き続いて「食」との関連で栽培活動を行うことを柱に、活動の継続性ということにも着目して研究しようとした。昨年度と同じ活動を行うことで、昨年度から継続の生徒は安心感と見通しをもって活動に取り組むことが可能となり、今年度新しく所属した生徒もその姿を見て活動にスムーズに入ることができた。

4. 栽培作業の実際

(1) 年間の主な活動

月	活 動	月	活 動
4	ジャガイモの栽培 春大根の栽培	11	調理と試食（肉じゃが） 蕎麦の収穫
5	里芋の栽培		里芋の収穫・保存
6	長ねぎの栽培 玉ねぎの収穫・保存 調理と試食（大根の味噌汁） 春大根の収穫・販売 小麦の収穫・乾燥 ジャガイモの収穫・保存 調理と試食（みそ汁）	12	玉ねぎの栽培（来年向け） 小麦の栽培（来年向け） 人参の収穫・保存 短根ゴボウの収穫・保存 長ねぎの収穫 秋大根の収穫 調理と試食（豚汁） 野菜の単品とセットの販売
7	人参の栽培 短根ゴボウの栽培 蕎麦の栽培	1	蕎麦の脱穀
9	秋大根の栽培	2	調理と試食（小麦で）
10	小麦の脱穀	3	調理と試食（蕎麦で）

(2) 栽培作物について

- ・里芋、ジャガイモ、ゴボウは連作障害を起こすので毎年計画的に耕地を替える。
- ・病虫害や鳥の害が心配される作物や、夏季休業中に収穫時期をむかえる作物はなるべく避ける。
- ・消費計画や販売計画を立てて無理の無い栽培量とする。
- ・みそ汁、肉じゃが、豚汁など実際の料理を想定して、その材料となる野菜を栽培する。
- ・冬期間の作業活動の題材として小麦と蕎麦を栽培する。校地内で椎茸の栽培も行う。
- ・作物のうち里芋、小麦、蕎麦を毎年サイクルして栽培する。



ジャガイモの花



蕎麦の花

(3) 耕地と栽培期間

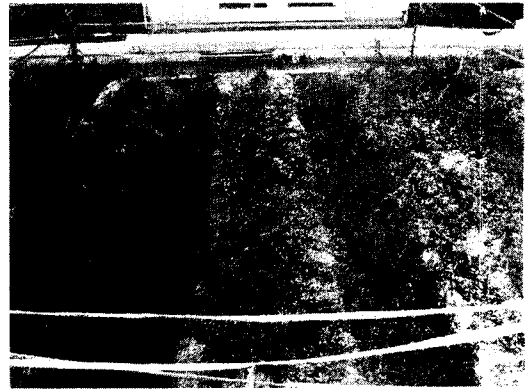
- ・校地内の主耕地（約 19m × 4 m）を 6 ブロックに分け、それぞれ季節に合わせた野菜を栽培する。（図-1）
- ・その他、校舎裏の 1 畝分（約 5 m × 1 m）には小麦（11 月～6 月）と蕎麦（7 月～11 月）を栽培する。

里芋 5～11月	春大根 4～6月	長ネギ 6～12月	玉ネギ ～6月	ジャガイモ 4～7月	ジャガイモ 4～7月
	短根ゴボウ 7～12月		人参 7～12月	秋大根 9～12月	玉ネギ 11月～

図-1 平成 19 年度の作付け



初夏 収穫間近の玉ネギ

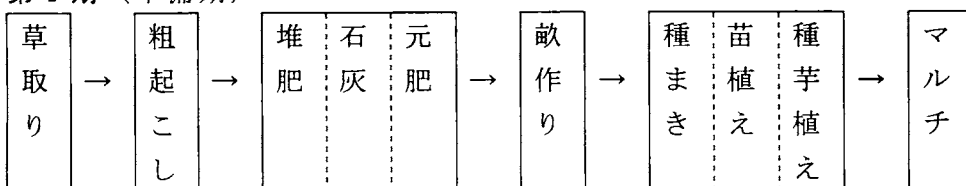


夏 雑草の中の人参

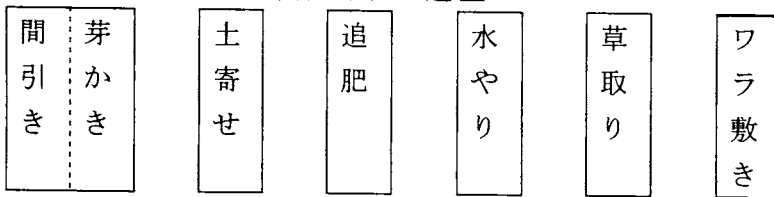
(4) 栽培の方法と工程

- ・生徒は基本的に道具を使用して手作業を中心に活動を行う。粗起こしには教師が補助的に小型耕運機を使用することがある。
- ・野菜をそれぞれブロック単位で栽培することで管理や作業をしやすくするとともに、生徒たちにも当日の作業場所や作物の認識、活動の見通しをもちやすくする。
- ・生徒が作業をしやすいように畝の間を通常より広く取るようにする。
- ・種まきや苗植えは細かな手作業になり、場所や間隔に目安となるものが必要である。そのための用具などを工夫する。
- ・農薬は基本的に使用しないようにする。
- ・作業の流れを表にして、長いスパンの栽培活動をイメージしやすくする。

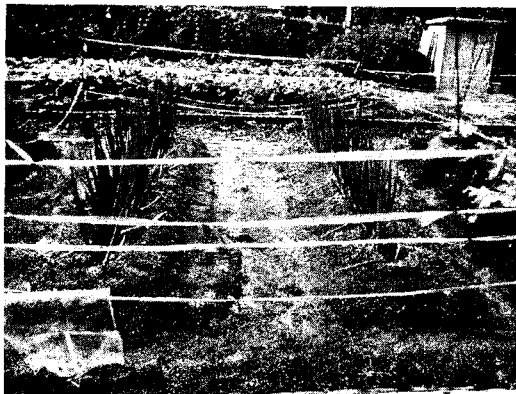
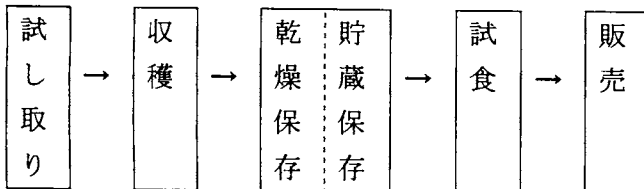
第 I 期（準備期）



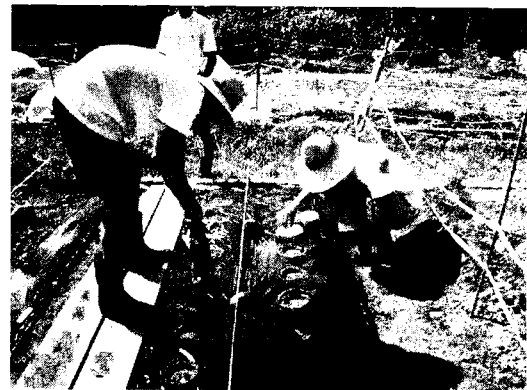
第Ⅱ期（栽培期）作業活動は適宜



第Ⅲ期（収穫期）



畝の間を広く取った長ネギ畑



用具を使った大根の種植え

（5）試食・販売

- ・みそ汁、肉じゃが、豚汁の材料として栽培した野菜を使用し、調理を行い試食する。
- ・試食活動で野菜の栽培が、人にとって大切な「食」につながっていくことを感じる。
- ・授業の中で試食活動を行うことにより、栽培した野菜への認識を深め、販売活動や栽培作業への意識と意欲を高める。
- ・バザーなどの行事や懇談日を活用して、収穫した野菜の直接販売や予約販売を行う。

（6）評価

- ・生徒自ら自己評価票の「がんばりカード」で目標を確認することで、作業に対する前向きな気持ちづくりを行う。
- ・作業日誌と併せ、生徒一人一人の態度面や作業面での様子を観察・記録する。
- ・販売活動で得たお金が何にどの様に使われるのかを知らせ、学校生活の中での自分たちの存在や活動を肯定的に捉えられるようにする。

5. 生徒の様子

今年度の栽培・クラフト班は1年生3名、2年生1名、3年生1名の計5名である。この内、昨年度から引き続いてこの班に所属となった生徒は1名だけであった。昨年度から所属していた生徒は作業内容の理解も早く、自信をもって活動に取り組む姿が見られた。新しく加わった生徒4名の内2名は年度当初から身支度をして菜園に出向くことができた。

畑作業は初めてであったが鍬での粗起こしや肥料やり作業なども友だちの作業手本を見ることでスムーズに取り組むことができた。もう2人の初めての生徒は菜園への移動はできたが、栽培作業に直接かかわることは難しく感じられた。その後は授業回数を重ねるにつれて耕地や作業場にも慣れ、教師の援助を受けて簡単な作業をしながら、友達と一緒に活動の場に居ることができるようになった。皆と一緒にその場にいることで他の生徒の動きを間近に見ることになり、教師が誘いかけることでその反応を見ることもできる。目の前で行われる作業のなかで、気持ちを動かす動作や活動が見つかることを期待したい。

栽培する作物には実際の料理を想定し、材料として必要となる野菜を育てた。収穫後には野菜類を調理して試食をした。実際の料理を知ることによって野菜をより身近に感じ、「食」と深いかかわりのある栽培作業への意欲を高めようとした。試食活動では嬉しそうに何度もお代わりをする生徒の姿があった。また、直接販売の場面では、お客さんである保護者や職員に慣れない手付きで野菜の入った袋を渡していたが、その表情は生き生きとしていた。栽培から収穫・試食・販売と、それぞれの活動場面で見せる生徒たちの様子に、次の意欲へとつながる姿を垣間見ることができた。

昨年度から導入した自己評価票の「がんばりカード」は、生徒自身が授業の始めに今日の作業に対する目標項目を選び、終了時に結果を発表するものである。授業の終わりに満足げな表情を見せて発表する生徒の姿に活動への意欲が向上した様子が感じられた。



草捨て作業



大根の味噌汁づくり

6. まとめと学び

「生きる力」を育むための手だてや活動およびその内容を探ることを目的として5年間、研究実践を行ってきた。そこで生活の基本であり、生きていくための原点でもある「食」をキーワードに「栽培」「自然」「健康」「安全」などを観点として授業を行った。

生徒一人一人の可能性を探りながら、広がりをもった活動へと導き、知識を伴った安定した豊かな心を育みたい。同時に生徒一人一人の特性を活かしながら興味や関心を高め、意欲的な気持ちを育てたいと考えてきた。

栽培学習は準備から収穫・保存まで長期に渡り、作物によっては年度をまたいで栽培するものもある。どの野菜の栽培にも長い期間をかけて取り組む必要があり、様々な作業場面や作業工程がある。耕地の準備から始まり野菜の成長に合わせて作業内容が変化していくが、栽培の工程にはどの野菜もほぼ同じ様な活動内容が多く、見通しがもちやすいといえる。見通しをもつことで生徒の気持ちが安定し、自信をもって取り組むことが可能となる。生徒の感性に働きかけることにより、作りだすことの楽しさを体験させ、働くことに

対する前向き意識を高めることができたのではないか。

研究では作業学習の栽培活動を中心に、そこで栽培される野菜を題材としてほとんどの生徒が興味と関心をもつ「食」とのかかわりの中で考えてみた。「食」に関する活動を展開し、自分たちが栽培した野菜と「食」とのかかわりを強く印象づけようとした。

また、前年度と同じ作物を栽培し、販売や試食活動もほぼ同様に行うようにした。継続の生徒は前年度と同じ活動を繰り返すことで、安心感と見通しをもって栽培活動に取り組めたのではないか。また、その友だちの姿を見ながら新しく所属した生徒も活動にスムーズに入っていくことができたように思われる。作業班の中に継続する生徒と一緒に構成することで教師だけでは補えない活動の継承につながる。

今までの学習や体験を通して会得した知識や技術をもとに、そこから生まれる感覚や気持ちを大切に自分で表現していく。そこに生徒一人一人の「生きる力」の形がある。

人とのかかわり、「自然」を相手に野菜を栽培する。自分たちで育てた野菜を味わい、販売する体験を通して、自分を見つめ一歩ずつ自信をもって成長して行ってほしいと願っている。

終わりにこの実践研究を通して学び、気づいたことを箇条書きに記す。

- ・長いスパンの活動は、生徒、教師ともに気持ちに余裕をもって取り組むことができる。
- ・繰り返し積み重ねる長いスパンの体験的な学習活動は、見通しをもちわかりやすさにつながる。
- ・体験的な学習活動は単なる知識の獲得としての学習にとどまらず、より印象に残る活動となる。
- ・記憶を呼び起こされる学習は、よりわかりやすい授業となり、そこに安心感を伴った自信が生まれてくる。
- ・活動を「食」と関連づけることで生徒の興味や関心が高まり、授業に対して意欲的な気持ちが生じる。
- ・栽培作業と調理・加工学習を関連付けることで生徒の興味や関心が高まり、ものを作ることの楽しさを知る機会となる。
- ・栽培を通して「自然」に向き合い、「自然」に親しむことができる。
- ・環境への関心をもち、自分の健康や安全について考える機会となる。
- ・同じ作業を協力して行うことで互いに見合い、友だちの姿を身近に感じ連帯意識が生じるとともにコミュニケーションの場となる。



春 友だちと一緒に粗起こし



秋 力を合わせて里芋の収穫

自分の感性に気づき認められるように

村瀬真理子

研究協力者：武居 渡（金沢大学教育学部准教授）

1. はじめに

高等部では美術の授業は選択制であり、前年までは主に絵画を扱っていた。今年的美術は絵画と造形の2分野で行うこととし、造形を担当することになった。

造形の授業では、

「造形というのは楽しい。」

「私は造形が好き。」

「表現することは面白いこと。」

そんな思いを生徒たちにもって欲しいと考えた。

そしてそれをきっかけにして、もっと造形作品を作りたくなったり、他の美術作品への関心をもつことができたり、さらに自分に自信がもてたりできたらどんなにいいだろう。また、美術の時間は何か作品を仕上げるもの、描くことは苦手、作るのは苦手・・・そうではなく、表現することが美術、こころが動くことが美術、こころが動くことで身体が動くことが美術なのだと思う。

そんな美術の授業をめざすために、授業を振り返りまとめてみることで、考えを深め、今後に生かしていきたいと考えた。

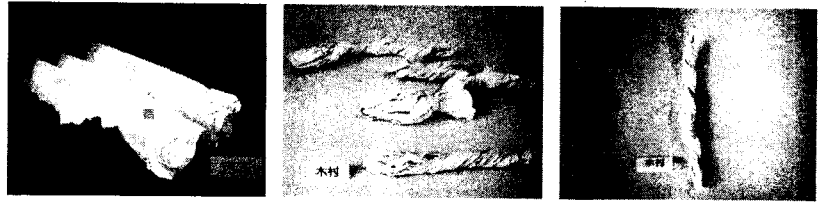
生徒は7名である。3年2名、2年3名、1年2名の計7名。教師は2名である。私は全体の主たる指導を行い、もう1名の教師は主に自閉傾向の強いO男を支援している。また生徒と一緒に制作に加わり、雰囲気盛り上げたり制作のモデリングをしたりもしている。

2. 授業の内容と流れ

1学期は造形遊び的な活動で、作品を作るというより自由に表現することの楽しさを味わえるように、2学期からは落ち着いて作品制作ができるように計画を立てて進めている。

時期	単元と時数	○課題設定の理由とねらい ●活動の概要 □生徒の様子
4月	白い紙の造形Ⅰ (2時)	○たった1枚の白い紙からのスタート。折り曲げるだけで「海」になったり、感情を表現したりできることを体験する。白い紙は無限に広がる可能性をもっている。 ●ひとつの平面が、折り曲げたり寄せたりアプローチすることにより表現となる例を見せ、条件を与えて作る。即興的に制作するが、写真に撮り作品として掲示した。

- ①海
- ②自由課題
- ③「痛い」



初めての授業で、とまどいもあったが、一本の線を折ったりぐしゃぐしゃにするだけで表現できることを知り、自分が大好きなキャラクターや身近な家族などを表現することができた。生徒たちの表情は明るかった。

5月 白い紙の造形Ⅱ
(2時)

- 1回目と同様白い紙からのスタートであるが、1枚の白い紙を型紙の線に沿って切り抜いた後、変化させることにより多様な表現ができることを体験する。
- 教師が用意したうずまき形の型紙に沿ってはさみで切る。その後、手を加えて変化させ写真撮影し、タイトルをつけて作品にする。



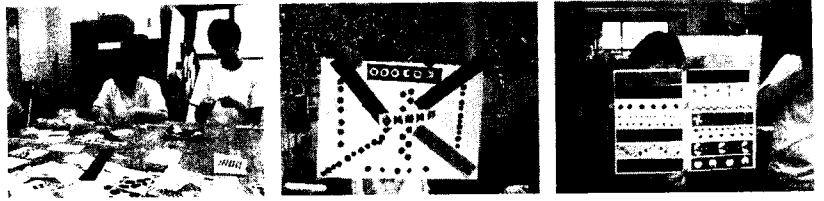
「ガララとよるろ」

「空へ」

切り上がった形を見てイメージしたものがあり、それをもっと表現しようとして、とても工夫する姿が見られた。同じ紙から同じ型紙でできたとは思えないバリエーションができた。タイトルの付け方も重要な要素のひとつであることも経験した。

6月 くりかえしの模様
(4時)

- 単純な形のくりかえしにより面白い模様が作れる楽しさを体験する。
 - 円形シールを細長いテープに並べ貼り付けることによって模様を作る。1枚のテープには3回以上模様を繰り返すことを条件にする。
- 1回目の授業では円形シールをそのまま使用し、2回目は、切っても良いという条件をつける。最後に画用紙に構成し作品とする。



初めは教師の模倣から始まった生徒もいたが、次第にオリジナリティあふれる模様に変化していった。修学旅行の事前学習の後だったせいもあり、ディズニーのキャラクターを楽しんで作っていた生徒もいた。〇男は夢中になって模様作りを行っていた。生徒たちがとても楽しんでおり、1回の予定であったが、次時に少し発展させてもう一度行うこととする。

彫刻像になる
(2時)

○彫刻像のポーズや表情を体験してみることで作者の意図について考えたり、自分でもオリジナルの彫刻像になったり、からだでの表現を通して彫塑の表現について考えたりする体験をする。

- ①「ロダン・考える人」になる
- ②「オリジナル・考える人」になる
- ③「ダンス・ダンス」
- ④手の彫刻像
- ⑤抽象彫刻にも挑戦

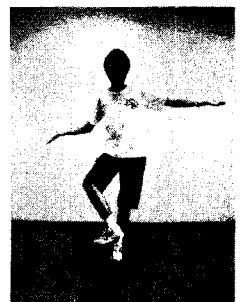
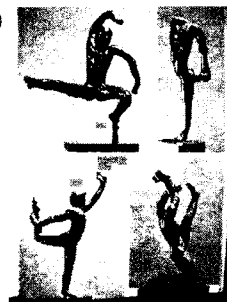
①



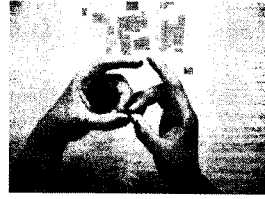
②



③



④



⑤

皆の前でポーズを取ることに照れがあると難しいので心配したが、思いの外、生徒たちは照れることなく身体表現を行った。普段は人前での発表が難しいY子も、皆の前でポーズを取ることができた。

新聞紙と遊ぶ

(2時)

- 「新聞紙は何に使うもの？今回はいつもと違った使い方をしましょう」と提案をし、発想を変えて楽しむ。
- ①音を楽しむ。楽器にもなる。
- ②ゲームもできる。はしっこ持ち・的当てなど。
- ③クイズ作成。穴をあけて顔の部分を見せる。
- ④新聞紙とダンス。音楽に合わせて。



予想以上に生徒たちは楽しめたようである。K子は授業が終わり教室に帰るなり、「新聞紙、楽しかった～」と担任教師に話したらしい。N子は、新聞紙を自由に切り取って衣装を作り踊っていた。普段身体を動かす活動の苦手なO男も教師といっしょに自然に身体を動かして踊っていた。他の授業では見られない様子である。いつもの図工室ではなく、広くて障害物のない高等部ホールで行った。窓から室内の様子を見て、早めに授業が終わって他の選択授業の生徒たちも入ってきて一緒に踊った。教師の私自身、音楽に合わせて夢中になって踊っていた。

7月 山をつくろう

(4時)

- 小麦粉や小麦粉とおがくずを混ぜたものなど、身近なところにありながらあまり触ったことのない素材で新

鮮な感触を味わう。既成の粘土でないことから発想が広がること、山というシンプルな形なので挑戦しやすいことからこの課題を設定した。また山のイメージをつかむために写真集をスクリーンに大きく映して見る。近くの山だけでなく火山や溶岩、宇宙など多様な山を準備する。

- ①小麦粉だけの感触を味わう。
- ②水を混ぜ、練る。
- ③おがくずと水を混ぜ、練る。
- ④山の形に作り上げる。



生徒たちははりきって授業に参加していた。消極的なN子も自分から容器を出すなど積極性が見られた。小麦粉を練るのは大変だったようだが、さらさらの小麦粉がどろどろ・べとべと、普段味わえない感触に変化していくのは興味深かったようである。

9月 しぼり染め
(10時)

○2学期からは少し作品らしい形のあるものということで、まずしぼり染めを行う。洗濯ばさみで止めたりガムテープで貼る等の平易な方法でも面白い模様が染め上がるので、生徒たちは興味をもって取り組むことができる課題である。

- 小さな布で試し染め2回の後、薄い綿ポイルに染め、布の透過感を生かし空間に吊す作品にする。



1回目、不機嫌に声を上げながら授業にやってきたO男は、染料を溶こうとするのを見て、すぐに積極的な姿勢に変化し、最後まで授業に熱心に参加した。染め上がった布をほどく工程が最も楽しみなところで、実習のために不在となるY子は、翌週に自分で行うからほどかないでねと私に伝えた。最後に仕上がった作品を見て、N子は「予想をはるかに超えて、宇宙まで超えて、びっくりしました。」という感動的な言葉を残してくれた。

	以降の授業については、やきものと針金のオブジェを計画している。
--	---------------------------------

美術の授業だから何か作るんだらうという気持ちを抱きがちであるが、作るということにはさまざまな意味があることを生徒たちにまず伝えたい。しかし1回1回の授業がやりっぱなしにならないよう、掲示物や保護者への授業だよりを作り、心に残るように努める。モノを作ることだけが造形ではないことは授業をすすめていくうちに少しずつ理解してもらえたようである。

3. 授業を通して

さまざまな活動を経験するうちに、生徒たちは自分の作ったものを発表したり写真に撮って掲示されることに対して慣れ、抵抗がなくなったようである。始めは恥ずかしかったところもあったが、掲示を見て褒められたり声をかけてもらえることは決して嫌なことではないようである。今度はどんな課題でどんな表現をするのか、「次の美術は何するの?」と生徒たちから聞かれうれしかった。生徒たちは、思った以上に授業を楽しんでくれたようである。

4. 今後に向けて

授業の始まりの挨拶をする時、「姿勢を正して。」、毎回授業の始めには呼名をし、「先生の顔を見て返事してね。」と言うのだが、定着がされてきて、生徒たちはとても姿勢良く、また必ず私の顔を見て返事をしてくれるようになった。「この授業では、こうする」という決まりのようなものができてくるのが嬉しい。ゆったりとした気持ちで、自分を伸び伸びと表現してほしい造形の授業であるが、真剣な授業であってほしいし、積極的であってほしい。そこでもっと生徒たちが自主的にできることをさらに増やしていきたい。教室に入ってきたら自分の名前カードを貼る、机を拭くなどである。限られた時間の中ではあるが、授業の始まりや終わりの定番メニューのようなものができ、積極的・自発的に参加する気持ちが高まると良い。

またもっと生徒の様子を細かく記録したいのだが十分にできていないのが現実である。そのためには、生徒自身にごく短時間でその時間の振り返りができるような記録用紙があったら良いかもしれない。書くことが苦手な生徒でも記入することができるような様式を考えたい。このような方法は、教師にとっても有効かもしれない。

5. 最後に

今年造形を選択した生徒は、来年は何を選択するのであろう。同じ生徒であれば積み重ねができるが、違う生徒の場合は、また1からということになる。造形という授業を行う教師の立場からすれば、3年間継続してできればうれしいが、選択制であれば難しいであろう。生徒の立場にしてみれば、3年間でいろいろな授業を受けたい気持ちもわかる。単年度で考えていかなければならないとすれば、どんな題材や単元にするのが最も良いだろうか。

ともかく私の願いは、生徒たちが造形というものに面白味を感じ、学校以外の場においても、美術館へ行ったり、生活の中にある美について興味をもったりできることである。そして自分自身にも面白味を感じて好きになってくれることが究極の願いであろうか。

散歩を通した授業づくり

～豊かなかかわりを願って～

竹下規美代

研究協力者：武居 渡（金沢大学教育学部准教授）

1. テーマ設定の理由

中学部の3年生は4月当初男子2名、女子2名の計4名で構成されており担任は2名である。生徒同士のかかわりがあまり見られず教師とのかかわり、一方的なかかわりが中心で、個性が強く、興味の対象・行動のペースもそれぞれ違うため、一つの活動に全員が取り組むことは難しかった。たとえば当初の散歩では、S男、T男がどんどん先へ歩き、T子、K子はゆっくり歩いたり、また興味のあるものを見つけると立ち止まったり、座り込んだりと4人がバラバラに行動しクラスとしての集団の活動が難しいと感じた。しかし一人一人は花を見たり風を感じたり、黙々と歩いたり、どの生徒も表情はよかった。そこで生徒の興味関心があり楽しく期待感をもちながら参加できる『散歩』を通して、クラスの中での友だちのかかわりを増やし、新しい発見、気づきを学校生活全体へと広げていきたいと考え、このテーマを設定した。

2. 指導にあたって

今年度の3年生の『散歩』でのねらいを考えるにあたり、これまで中学部で行われてきた『散歩』について振り返り、学部の教育目標・個別の指導計画などを踏まえた上で目標を設定した。

(1) 散歩単元のねらい

今年度の生徒の実態に合わせたねらいは次の点である。

- ・ 自然の中で感じたり、触れたり、見たりなど身近な社会とのかかわりを広げ経験する
- ・ 友だちや教師とかかわり合い、一緒に活動を楽しむことができる
- ・ 先生から友だちへ視線が向けられるようになる
- ・ 散歩を通して自己選択・自己決定し自分の思いを表現する力をつける
- ・ 公共施設の利用の仕方やマナーについて知る

(2) 個別のねらい

保護者のニーズを大切に考え、個別の指導計画を基に個別のねらいを設定した。

① 個別の指導計画（保護者の願いの欄より）

名前	日常生活	学習	自立活動
S男	・ 特になし	・ 特になし	・ 落ち着いて毎日を過ごして欲しい
T男	・ もう少しゆっくり食事ができたらよい	・ 物の選択ができたらよい	・ コミュニケーションの方法が（意思表示）が身に付いたらよい
T子	・ トイレの中で用をすませられるようになる	・ 50音表で会話・受け答えが上手くできるようになる	・ 特になし

K子	・上手に食事ができるようになって欲しい	・好きなことを増やして欲しい	・特になし
----	---------------------	----------------	-------

②生徒のねらいと支援（教育目標・単元のねらい・個別の指導計画を受けての支援）

	生徒のねらい	教師の支援
S 男	<ul style="list-style-type: none"> どこへ行くか計画する段階で、自分で調べて思いを伝えることができる みんなのペースに合わせて歩く 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いとみんなの思いの折り合いを付けられるように、アドバイスをする
T 男	<ul style="list-style-type: none"> 乗り物、食べる物の選択ができる みんなに合わせた速さで歩く みんなと活動する中でゆったりとした時間を過ごし、友だちや教師とかかわる 	<ul style="list-style-type: none"> 出かける前に、希望の乗り物や食べ物を写真やカードで示す ペアを組み、友だちとペースをあわせるという場面を設定する 生徒の行動に対し声かけを少なくする
T 子	<ul style="list-style-type: none"> 行き先や食べたい物を伝えることができる 四季に触れたり感じたり、体感しながら散歩を行う みんなと活動をする中で楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 出かける前に、希望の行き先や活動を50音表で示すよう促す 道端の葉っぱを気にして止まったり、目標物に向かい急に走り出したりなど、危険な場面には対応できるようにしておく
K 子	<ul style="list-style-type: none"> みんなと活動をする中で楽しむ 四季に触れたり感じたり、体感しながら散歩を行う 	<ul style="list-style-type: none"> 止まったり座り込んだりした場面や急に走り出すなど、危険な場面には対応できるようにしておく

(3) 散歩から他の活動へ

散歩から見えてくる気づきや友だちとのかかわりを、他の活動へと広げていきたいと考え、年間を通して生活で行う活動に散歩を取り入れることとした。またその際に大切にしたい点を以下に記述しておく。

- ・子どもと子どもをつなげるような状況を設定する
- ・一人ではできなかった事が、仲間とかかわる中でできるようになっていくことを目指す
- ・小さな集団の学級から、大きな集団へとかかわりを広げる

①生活の時間の年間指導計画

(太字の項目は散歩と関連)

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
内 容	＜散歩＞											
	＜菜園作り＞二十日大根、レタス											
	＜調理＞サラダ、サラダうどん、かき氷、ケーキ											
	＜カリンバ作り＞教生さん歓迎・送別会											
	＜散歩掲示作り＞春夏秋冬											
	＜一泊旅行しおり作り＞											
＜制作活動＞ペーパーウェイト、フェルトシート、ランチョンマット、めがねケース、クリスマス飾り、マフラー、卒業制作（春夏秋冬）												
＜文集作り＞												

3. 活動の流れと計画

- <活動の流れ> 木曜 5・6 限 散歩の目的地や目的を話しあって決める
金曜 2・3・4 限 実施
- <年間計画> 1 学期 学校周辺～金沢市内
2 学期・3 学期 金沢市内 (雨天時：散歩の掲示作り・制作活動)

4. 活動の実際

(1) 手をつないで歩く

①「みみずく公園」 4月13日



T男とK子のペア

これまで男子2人が先を歩き、女子2人が教師と手をつないで歩いていた。速い二人が遅い二人とペアになればみんなそろって歩けるのではと考え、T男をK子のそばに呼んでみた。すると、T男はさりげなくK子の手を握り、行き帰りとも手をつないで歩くことができた。

②「金沢フォーラス」 6月8日



S男すごいぞ!

一人で歩いていたS男が、この日初めてT子の手をとって歩いた。手をつなげたことで、周りの生徒との歩く速さが調整でき、はじめて小さな集団として歩けた日である。

(2) 人とのかかわり

①「ポルテ金沢」 6月1日

S男 S男がパソコンを使って調べ、行きたいと希望した「ポルテ金沢」へ出かけた。喫茶店で、修学旅行の生徒と勘違いされ、女性二人に声を掛けられ、帰り際に「さようなら、気をつけて」と挨拶をされ、その声にオウム返しではあるが「さようなら」と返事を返す。

T子 周遊バスで隣の席に座った女性に、「いくつ」と50音表を使い問いかける。このことをきっかけに教師・T子・女性と三者での会話がはずんだ。にこにここととてもよい表情で指差しに励むT子の姿が見られた。

②「一泊旅行」 10月25・26日



K子とおいで

福井県立恐竜博物館へ行った際、高いところが苦手なT子は、下が透けて見える通路にいることに気づき、その場に立ち止まって身動きがとれなくなってしまう。教師の「K子につかまっておいで!」の声を受けて、通りがかったK子の腕につかまり何とか歩いて戻ってくることができた。きっとK子を頼れる存在として感じたに違いない。K子の手を握るT子の手が今まで以上に強くなったように感じる。

(3) 散歩での活動から学校生活への拡がり

①「避難訓練」 5月2日

T男 避難訓練時、散歩のときと同じようにK子の手をとり一緒にグラウンドまで避難できた。クラスが集団としてスムーズに行動でき、早速成果が見えてきた。

S男 クラスの先頭に立ち、旗を持ちながら後を気にしつつ、みんなを先導してくれた。

②「連絡係り」

T子 連絡係りとして金曜日にK子の手をとり、保護者への配布書類を取りに職員室へ行く。時々手をはなしてしまい、K子が走り出してしまうことがあるが、「一緒に活動」を楽しんでいる様子がうかがえる。



一緒に運ぼう

③「着替え時」 10月16日

T子 更衣室へ向かい二人で歩いているときに、K子の手がぬれていることに気づき、自分のハンカチを取り出して拭くことがあった。

④「連絡係り」 10月17日

T子 職員室へ配布書類を取りに行く際、K子の好きな場所である高等部ホールの前を通った時、左手を使い入り口のドアを閉めた。偶然かなと思い、再度入り口のドアを開けておくと、やはり左手を使い同じようにドアを閉めたので、「K子が中に入らないように」と考えた行動と思われる。また嫌な時はからだ全体を突っ張ったり、ねじったりして抵抗するK子が、スムーズに立ち止まることもなく歩く姿に、子ども同士のかかわりあいから生まれる力のすごさに驚いた。

⑤「朝のキャスターバス押し」

K子 いつも外出の際に手をつないでくれるT男に、お礼のつもりでT男の好きなキャスターバスを押してあげることに教師とともにチャレンジした。最初はすぐに手を離してしまうことが多かったが、一緒に押しているY男が誘ってくれるようになり、沢山の友だちに声を掛けられることがうれしい様子で、キャスターバスを押す時間も長くなり、かかわりを「心地よい」と感じる様子がみられるようになってきた。



一緒に押そう

⑥「教室移動時」 6月4日

K子 グループ学習を一緒にしている中2のS子と、体育館での集会後、体育館から外階段までと短い距離ではあるが、手をつなぎ一緒に歩く姿が見られた。週に8時間ともに活動している中で、友だちとのかかわりがもてた最初の日である。



おいで!

⑦「グループ学習の時間」

K子 グループ学習のはじめに行っているティータイムの時間に、お菓子を選ぶ場面や、おかわりを求める場面で「ちょうだい」「いいよ」「だめよ」などS子からの発信が多いものの、K子も手を伸ばしかかわる姿が見られるようになり、二人のやりとりがとてもほほえましく見えることが増えてきた。

(4) 制作を通して

一本のマフラーを両側から制作していく過程で、T男とT子が対面で座りお互いを見ながら楽しそうに活動をしている姿が見られた。T男はマフラー作りに使うお湯の感触を楽しみ、T子も大好きな色の羊毛を選び満足そうに手を動かし活動している。その様子をK子が歩きながら気にしながら机に寄ってきて見ている、そしてまた歩き出す。T男とT子が作った作品を身にまとい、K子が教室の中をまるでモデルが歩いているかのようにいい表情で歩く。クラスの中に一体感を感じた時間であった。K子の「座ることが苦手」というマイナスイメージが、「座らなくても参加できる」というプラスイメージへ転換し、そしてこの制作活動には欠かせない存在であることが発見できた。視点を変えてみる必要性を実感した貴重な時間となった。制作したマフラーを身につけ、また散歩に出かけたいと思う。



マフラー作り

5. 今後の課題とまとめ

9ヶ月あまりの散歩を通して、たくましくコミュニケーションをとろうと50音表で話しかけるT子、待つことや我慢を徐々に身につけてきているK子、周りとのペースをあわせようと努力しているT男、自分の思いとみんなの思いの折り合いを付けながら活動していたS男、それぞれの新しい発見があったと同時に、さまざまな課題点も挙げられた。課題点に対しては、表1-1のように学校生活の中で日常生活の指導の時間や生活の時間などを利用して指導してきたが、クラス内の指導にとどまり、教科学習や学部全体の活動への拡がりまではいかなかった。また年齢的なことを考慮すると、手をつながずに歩けるようになるための次のステップも考えていかななくてはならない。より身近な生活(家庭生活・社会生活)に近い状況での実体験から明らかになった課題点は、日頃家庭でも問題点として家族が感じ、悩んでいる点でもあろう。今後もきめ細かな指導を継続していきたい。

この実践を通し、K子にとってT男は一緒に歩いてくれる(リードしてくれる)存在、T子にとってK子は不安な時に(高いところを移動する時)力を貸してくれる存在、K子は自分たちが作った物を広めてくれる(PRしてくれる)存在、それぞれ3人が力(個性)を発揮しながらそれぞれに必要な存在となっている事、そして3人に友だちを意識する目(芽)が出始めてきたことが嬉しく感じられる。さらにこの芽が太くしっかりと伸びて欲しいと願う。

生徒が活動に没頭し、熱中できる状況作り(活動内容の吟味・わかりやすい流れ・使いやすい道具など)、そして仲間との自然で実際的な生活が、生徒の内側からわきあがる「力」となって表れてくるのではないだろうか。『散歩』そして中学部でのまとめとしての、卒業記念品へつながる制作活動を通して、小さいけれど心に変化し、成長している様子が見られた事を教師だけでなく、保護者もともに実感できた事が成果だと考える。思春期の身体

と情緒が不安定な時期だからこそ、生徒に寄り添い、そして感じ、共感しながらゆったりと丁寧にかかわる必要があることを改めて感じた。学校が生徒にとって楽しく、また明日学校へ来たいと思えるよう、生徒の未来がさらに豊かなものになることを願って「生活づくり」に取り組んでいきたい。

最後に、保護者から寄せられたお便りと、研究より見えてきた生徒の主体性を引き出すための構造図（図1）を記載する。

- ・ 9月27日 家での生活もゆったりできるようになってきています。
- ・ 9月28日 自分の食べたいものを選べたことはすごいです。
- ・ 10月19日 散歩の掲示作り完成が楽しみです。 (T男母より)

- ・ 10月25日 これまで大人の手をとり要求を出すことはありましたが、最近よく友だちと手をつないでいる様子を見るようになり、友だちへの関心が出てきたのだとしたら嬉しく思います。 (K子母より)

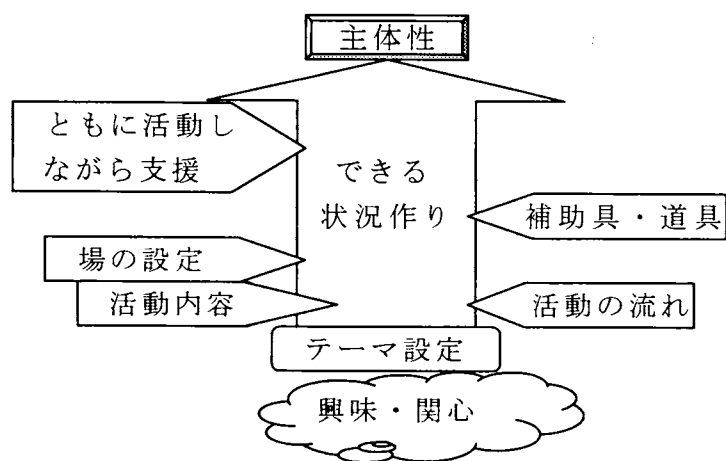


図1 生徒の主体性を引き出すための構造図

資料：散歩コース（11月現在）

日 時	散 歩 コ ー ス
① 4月10日（火）買い物学習	学校・・ひまわりチェーン・・学校
② 4月12日（木）鈴見橋	学校・・鈴見橋・・学校
③ 4月13日（金）みみずく公園	学校・・公園・・学校
④ 4月27日（金）喫茶「友愛」	学校・・小将町バス停＝市役所前・・学校
⑤ 5月18日（金）中央公園	学校・・中央公園・・学校
⑥ 6月1日（金）ポルテ金沢	学校・・兼六園下ー金沢駅・・ポルテ金沢・・金沢駅ー兼六園下・・学校
⑦ 6月8日（金）金沢フォーラス	学校・・兼六園下ー金沢駅・・金沢ホーラス・・金沢駅ー兼六園下・・学校
⑧ 6月15日（金）アトリオ	学校・・小将町バス停＝アトリオ前＝小将町バス停・・学校
⑨ 6月29日（金）松任分校、車遊館	学校～松任分校～車遊館～松任分校～学校
⑩ 7月13日（金）エムザ	学校・・小将町バス停＝エムザ＝小将町バス停・・学校
⑪ 9月20日（木）買い物学習	学校・・ひまわりチェーン・・学校
⑫ 10月2日（火）八坂	学校・・自販機・・八坂・・学校
⑬ 10月9日（火）金沢神社	学校・・金沢神社・・学校
⑭ 11月13日（火）兼六城下町	学校・・店・・学校

徒歩・・ スクールバス ～～ 周遊バスー フラットバス＝

表1-1 課題点・発見点および手だてと指導場面

* 日時は上記の日時と連動

日時	●課題点○発見点	手だて	指導場面
①	●K子トマトを握りつぶす	待つ経験を増やす	生活、グループ、給食時
②	●T子・K子座り込んだり立ち止まったりする	ペア作りをする	生活、学校生活全般
③	○K子がT男と手をつなぎ座らずに歩く ○S男後を見ながら歩く	見守りながら距離を保つ	
④	○S男デジカメで写真を撮る ○T男がK子をリードして歩く ○T子50音表で看板名を伝える	好きな活動を見守る 聞き相手をする	
⑤	○T子50音表を使い話す		
⑥	○S男挨拶をする ○T子女性と会話 ●傘の持ち方・立て方・足の置き方	傘の持ち方・立てる位置・足の置き方のモデルを示す	生活（雨天時） 日常生活（下校時）
⑦	○S男がT子と手をつないで歩く ●T子お金をすべて出す ○K子落ち着いてバス・店の利用ができる	支払いのモデルを見せる・絵で示す	生活、グループ（数学）
⑧	○S男正確に支払いができる ●T子バスの座席で足を上げてしまう（制服着用時）	スカート着用時のマナー・座り方を示す	日常生活（下校時） 儀式
⑨	●T男ジュースを一気のみ ●T子傘をさすがぶぬれ ●T子玄関先でズボンをおろす	ゆっくり飲むモデルを目の前で示す 移動の前にトイレの確認をする	生活、給食時 生活（雨天時） 生活、日常生活

⑩	○T男真似してゆっくりと食べる ○K子手を出さず我慢して待つ		
⑪	○それぞれ自分の好きなジュースをカゴに入れる		
⑫	○T男・T子・K子3人で手をつないで歩く	3人の位置を配慮する	
⑬	○T子じっとしいの実を見る ○K子びよんびよん跳んだり教師に抱きついたり楽しい様子を示す	一緒に共感する 気持ちを受け止める	
⑭	○それぞれ自分の好きなケーキを選ぶ		

*生活：生活 日常生活：日常生活の指導 グループ：教科学習（習熟度別）

生徒の生活を広げるグループ学習づくり

～子と親のニーズを大切にしながら～

岩沼見奈

研究協力者：吉川一義（金沢大学教育学部教授）

1. テーマ設定の理由

(1) グループ学習について

本校中学部では、国語・数学の教科を中心に学習する授業として「グループ学習」を行っている。年度当初、中学部の教師で個人差や習熟度、子ども同士の相性などを十分に話し合っグループ編成を決める。また「グループ学習」だけではなく、「美術」「作業学習」でも同じグループ編成で授業を行っている。

(2) これまでの研究より

中学部の「グループ学習」を研究対象として取り上げて今年で5年目となる。毎年、対象となる生徒も変わり、グループ全体の実態も異なる。そこで生徒の実態を受けて、下記のようにグループの「年間目標」を設け、実践研究に取り組んできた。

年度	グループの年間目標	主な研究の手だて
平成15年	生徒が見通しをもって活動し、そこに教師と一緒に活動することで互いのコミュニケーションを深める	生徒が好きで見通しのもちやすい「散歩」を活動の柱として、授業を展開
平成16年	生徒が見通しをもって自ら活動し、そこに教師と一緒に活動することで実際生活に必要なコミュニケーションを身につける	生徒が好きで見通しのもちやすい「散歩」を活動の柱として、授業を展開
平成17年	自分のしたいこと、してほしいことなどを何らかの方法で教師と伝えあい授業に見通しをもって落ち着いて活動を共に展開する	生徒が好きなことである「食べ物」を取り入れた授業を展開 ICFの概念を参考にし「心身機能」「活動」「参加」から活動を客観的に評価
平成18年	友だちとの集団活動を通して、生活につながり、生活を広げる知識・技能を身につける	「生徒の好きなこと」を尊重し 「友だち同士のコミュニケーション」の活性化をはかり、「生活につながる教科学習」のあり方を探る

さらに、これまでの実践研究を通して、次の4点について学んできた。

- 同じ活動を長いスパンで繰り返し行うことが、「見通しをもつ」ことにつながり、見通しをもって活動に取り組む中で生まれる「できたという実感」が生徒の「自信」や「主体的な活動」にもつながる
- 活動性の向上を生徒の好きな活動を取り上げることで促し、生徒の気持ちを尊重しながら活動を展開することが、生徒の「伝えたい力(ことばなど)」要求表出につながり、期待や意欲を高め、自分の活動に新しい知識・技能を関係づけることにもつながる
- 友だちや教師など相手を必要とする活動が相手を意識させ、人とかかわる機会を豊かにし、人とつながりながら活動することに喜びを見いだすことが、さらなる意欲となる
- それぞれの活動において「今なぜ、この活動をしているのか」が子どもにわかる形で活動を展開することが、授業以外の場面での、習得した知識・技能の汎化につながる

(3) 生徒の実態

今年度、担当となったグループは、1年生4名、2年生3名、計7名で構成されており、担当教師は1名である。活動内容によっては、教師2名の体制をとっており、2年生3名は昨年度より、本グループに所属している。

4月当初、共に過ごす中で下記のような、生徒の実態が見えてきた。

- ・対教師との会話は非常に活発であるが、対生徒の会話は少なく、生徒同士のやりとりは活発ではない
- ・それぞれにスポーツ、絵画、ゲーム、パソコンなど「好きな遊び」や「今、したいこと」「将来のなりたい職業」など、自分の生活プランをしっかりとっている

また、様々な活動に取り組んでみたが、活動の見通しがもてていないためか、集団として落ち着いて活動するのは難しいという実態もあった。

本グループの保護者を対象に行った「グループ学習で育ててほしい力」などのアンケートでは、下記のように「活動への取り組み」「友だちとのコミュニケーション」についての願いが主に寄せられた。

- ・集中力をつけてほしい
- ・昨年度の取り組みを継続してほしい(調理・刺し子など)
- ・なにか友だちと最後までやり遂げる楽しさを感じてほしい
- ・コミュニケーションの力を伸ばしてほしい

そこで今年度のグループの年間目標を「友だちと楽しみながら活動に取り組み、生活に生かすことのできる知識・技能を身につける」とし、1学期の短期目標を「一緒に活動する友だちを意識し、友だちとのかかわりを楽しみながら学習に取り組む」とした。

(4) 研究の目的と方法

これまでの実践研究から学んだことを活かしながら、研究を進める。

具体的には、生徒の「好きなこと」「今、したいこと」を尊重し活動として取り上げ、一人一人の「自分の将来像」や「今、したいこと」などのニーズをどのように授業の中で反映したらよいか、友だち同士のかかわりが活発なグループ学習にしていけるためにはどうすればよいかを探ることにした。

2. 1学期の取り組みと生徒の実態の変化

(1) 取り組みについて

保護者の願いや生徒の「好きなこと」「したいこと」を尊重しながら授業を進めることを大切にしようと考え、1学期は「さんぽ」「調理」「刺し子」をグループ学習の主な活動として取り上げ、授業を展開した。また「さんぽ」「調理」では、友だち同士のかかわりを期待し、教師は最低限度のかかわりをこころがけ見守る姿勢を意識した。

(2) 活動内容と生徒の実態の変化

他にも1学期にいくつかの活動に取り組んだが、3つの活動から次のような生徒の変化が見られた。

活動	主な活動内容	生徒の主な様子の変化
さんぽ	喫茶店でのティータイム 市内バス乗車	<ul style="list-style-type: none">・会話をしながら生徒同士が集団で歩く・自分たちで様々なコースを話し合い計画する
調理	パン作り (昨年度からの継続)	<ul style="list-style-type: none">・中2の生徒がリーダー的な声かけを行う・友だちとの会話が増え、役割分担を自然に行う・材料の扱い方、食器洗いなどが上達する
刺し子	布に模様を縫う	<ul style="list-style-type: none">・運針などの技術が上達する・友だちと自分の作品を見比べたりすることで、次の作品への意欲をもつ・集中して取り組む時間が長くなる

その他にも、母親と家庭で「パン作り」を行ったり、刺し子を家庭に持ち帰り、親子で楽しみながら取り組んだりした生徒もいた。

このように見ると、1学期の取り組みから、友だちとかかわりながら取り組む活動が増え、技術面の向上が見られ、保護者の願いにあった「集中力」もついてきたと言える。また「さんぽ」から「お小遣いなどのお金」、「調理」から「材料の計量」「洗濯やアイロンがけ」、「刺し子」から「ミシンがけ」など、将来に向けて是非身につけてほしい知識・技能面の学習に広がる可能性が見えてきた。



みんなで「パン作り」に挑戦！

3. 2学期の取り組みと生徒の実態の変化

(1) 取り組みについて

1学期の取り組みを通して、新しく見えてきた次のような実態がある。

- ・買い物を経験していない生徒が多く、机上でお金を数えられるが、お金を支払うことが身につけていない生徒や、実際の場面でお金を落ち着いて数えられずに、自信をもって自分で支払えない生徒が多い
- ・一つのことに時間をかけて取り組むことは苦手ではなく、時間をかけた分だけ、達成感を味わえる生徒達である
- ・「お手紙活動」や「〇〇さんに作る」など相手を意識した活動には、より意欲が高まり、積極的に取り組む
- ・「絵を描く」「ものづくり」などの作業的な活動には集中して、落ち着いて取り組む

これらの実態をふまえ「買い物をするときはお金が必要であることを理解する」「友達と同じ目標をもって活動に取り組み、達成感を味わう」ことを2学期の短期目標にし、「お店活動」を大きな柱として授業を展開することにした。



「ろうけつ染め」に挑戦！

「お店活動」では新しい活動を行うのではなく、今までの授業で取り組む中で、自信がもてるようになってきたいくつかの活動を継続し、それらの活動に「お店で販売する」という一つのつながりをもたせた。さらに「なぜ、お店で作品を販売するのか」の理由がわかりやすいように、教師側から「2月の行事（ホテルでバイキング）で必要なお金をゲットする」という目的を提案した。

(2) 活動内容と生徒の実態の変化

「お店活動」では、主に「お金の計算」「魚の染め物」「刺し子」に取り組んだ。

「お金の計算」では、販売の目標をより明確にもってほしいと考え、2月の行事に向けて必要な金額をみんなで計算し目標金額として設定した。さらに店員として必要な、合計金額やおつりの出し方、お金の数え方などのお金の計算を繰り返し練習した。

また、「画家になる」ことを将来の自己像としてかかっている生徒がいること、絵を描くことに少しずつ興味が高まってきている生徒がいること、時間をかけながら道具を操作して物を制作することが好きな生徒がいることから、時間をかける必要のある「魚の染め物（ろうけつ染め）」に取り組むことにした。

「刺し子」は保護者の願いも強く、技能面の到達や、自信をもって取り組む姿が見られたため、継続して行うことにした。

他にもいくつかの活動に取り組んだが、主な3つの活動を展開することで次のような実態の変化が見られた。

活動	主な活動内容	生徒の主な様子の変化
お金の計算	<ul style="list-style-type: none"> ・お金を数える ・「合計金額」「おつり」を計算する 	<ul style="list-style-type: none"> ・2月の行事や目標金額を伝えることで、他の活動への意欲が高まり、「〇〇ちゃん、がんばろうね」「もっと丁寧に縫おうね」など、互いに声をかけ合う姿が見られる ・お金が苦手な生徒でも、目標を提示し、教材を工夫することで、根気よく練習に取り組む ・お店では、教材を活用しながら、お客さんとお金のやりとりができる
魚の染め物	<ul style="list-style-type: none"> ・ろうけつ染め ・ミシンがけ (作品をポストカードに仕上げ販売) 	<ul style="list-style-type: none"> ・とても長い時間、集中して取り組む ・作品が出来上がった時に「やった～」などと喜びを表現する ・友だち同士の作品を自分たちから見合い、良い点を褒めあう姿が見られる
刺し子	<ul style="list-style-type: none"> ・布に模様を縫う ・洗濯、アイロンがけ、ミシンがけなど作品製作 	<ul style="list-style-type: none"> ・運針だけではなく、玉止め、玉結びなどの技術の向上が見られる ・さらに、洗濯からアイロンまで、将来に向けて身につけてほしい活動にも、積極的に取り組む

このように2月の行事に向けての目標を、教師から提案することで、個々の活動への意欲が高まり、技術の向上につながり、友だちと一緒に取り組むことがより意識されたと言える。

(3)「お店活動」からの拡がり

11月にお店を開店した。2学期当初、生徒たちと計算し設定した売上目標金額は「15,300円」である。お店を開店し、20分後には「魚の染め物」のポストカード、「刺し子」の作品、その他の販売物も完売した。生徒たちの作成した作品は、それほど魅力があったのであろう。

後日、生徒たちと売上金を計算してみると、「10,130円」であった。「足りな〜い」「バイキングに行けない！」と残念がる生徒達。しかし、「もう一回、お店したい」と自分たちから提案してきた。それを受け3学期にもう一度、お店を開く予定である。

「魚の染め物」でモデルとなる魚を提供してくれた沖縄県のD氏にポストカードを送ったところ、また魚の写真が生徒達に送られてきた。その写真を見て「また魚を描く」「今度は〇〇の魚を描く」とやる気をもせてきた。そこで染め物の次は、大きな画用紙にクレヨンとラメのりや絵の具を使い、魚を大きく描いた。魚の形や色、模様の捉え方がしっかりとし、今にも動き出しそうな躍動感あふれる作品に仕上がった。それらの絵もポストカー



お金を計算するメンバー

ドに仕上げ、一人ずつがD氏にお手紙として送った。

このように「お店活動」から次の活動へ拡がり、人とのかかわりの拡がりが見られるようになった。なんとといっても、自分たちの手で拡がりをつくっている姿がとても嬉しいことであり、十分に教師の立てた年間目標や短期目標を達成していると言えるのではないか。



躍動感あふれる「沖縄の魚」の絵

4. まとめ

(1) 2学期までの活動の考察

1学期と2学期の生徒たちの変化を、ICF（国際生活機能分類）の概念を参考にしながら、「心身機能」「活動」「参加」の分野から図1、図2のように評価してみた。2つの図から、保護者の願いを大切に、生徒の「好きなこと」「したいこと」を尊重しながら活動を展開してきたことは、「活動」分野の活性化であったと言える。この「活動」の活性化が、「心身機能」の分野では技能面の向上とつながり、「参加」の分野では友だち同士のかかわりの増加につながったことがわかる。

「友だちと楽しみながら活動に取り組み、生活に生かすことのできる知識・技能を身につける」を年間目標にしている本グループの生徒にとって、これまでの取り組みは有効であったのではないか。

(2) 6年間の実践研究を振り返って

p.117の、これまでの実践研究から学んだ4点は、きっとどんな子どもが対象でも、どんな教科・領域の授業が対象でも、大切にされるべきことであろう。ただ、どんな授業や活動にしても、子どもの「主体性」がないと活動に拡がりや深まりは期待できない。そのためには、「子どものニーズ」にあった活動内容を取り上げる必要があるであろう。今までの実践研究では、この生徒のニーズを「生徒がしたいこと、やってみたいこと」と捉えて、授業に活かしながら研究を進めてきた。

実践研究を進める中で「生徒がしたいこと」を単に取り上げるのではなく、教師はそれをしっかりと吟味、分析し、生徒の生活を見通しながら、学校生活以外の家庭生活や社会生活への汎化が期待できる形で授業に取り入れていく必要があるということ学んだ。

さらに生徒は一人一人違うニーズをもっているため、それらをどのように1つの集団の授業に反映していけばよいのか悩んだ。同時に「さんぽ」活動から「お金」の課題が出てきたように、生徒のニーズから出てくる実践場面で役立つ力につながる課題を、教師はし

っかりと押さえていく必要があることも改めて感じた。この課題を具体的に探っていくことが、個々のニーズから集団の授業を考える第一歩となるのではない。

さらに「なぜ、今この課題に取り組んでいるのか」わかる形で生徒に伝えていくことで、生徒は学び、体験したことを確かな知識・技能として習得し、そのことが「自信」となり、将来の生活で活かすことのできる力となるのではない。

ただ、このニーズの捉え方やニーズを活かす方法は、生徒の実態によって変わるものであり、これからも多くの生徒と共に過ごし、生活する中で、ニーズを大切にしながら実践を行っていきたいと思う。

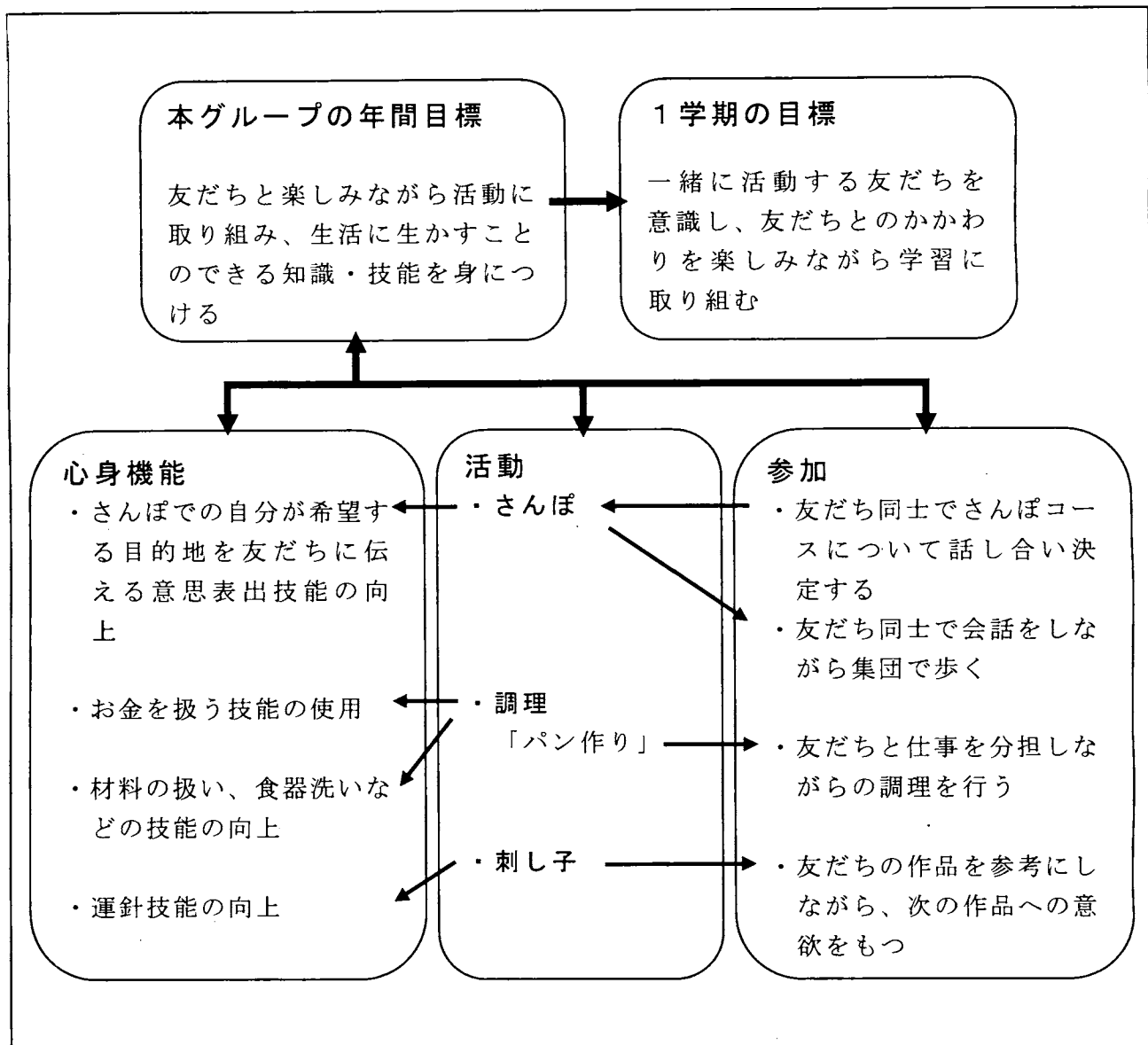


図 1 : 1 学期の生徒の実態

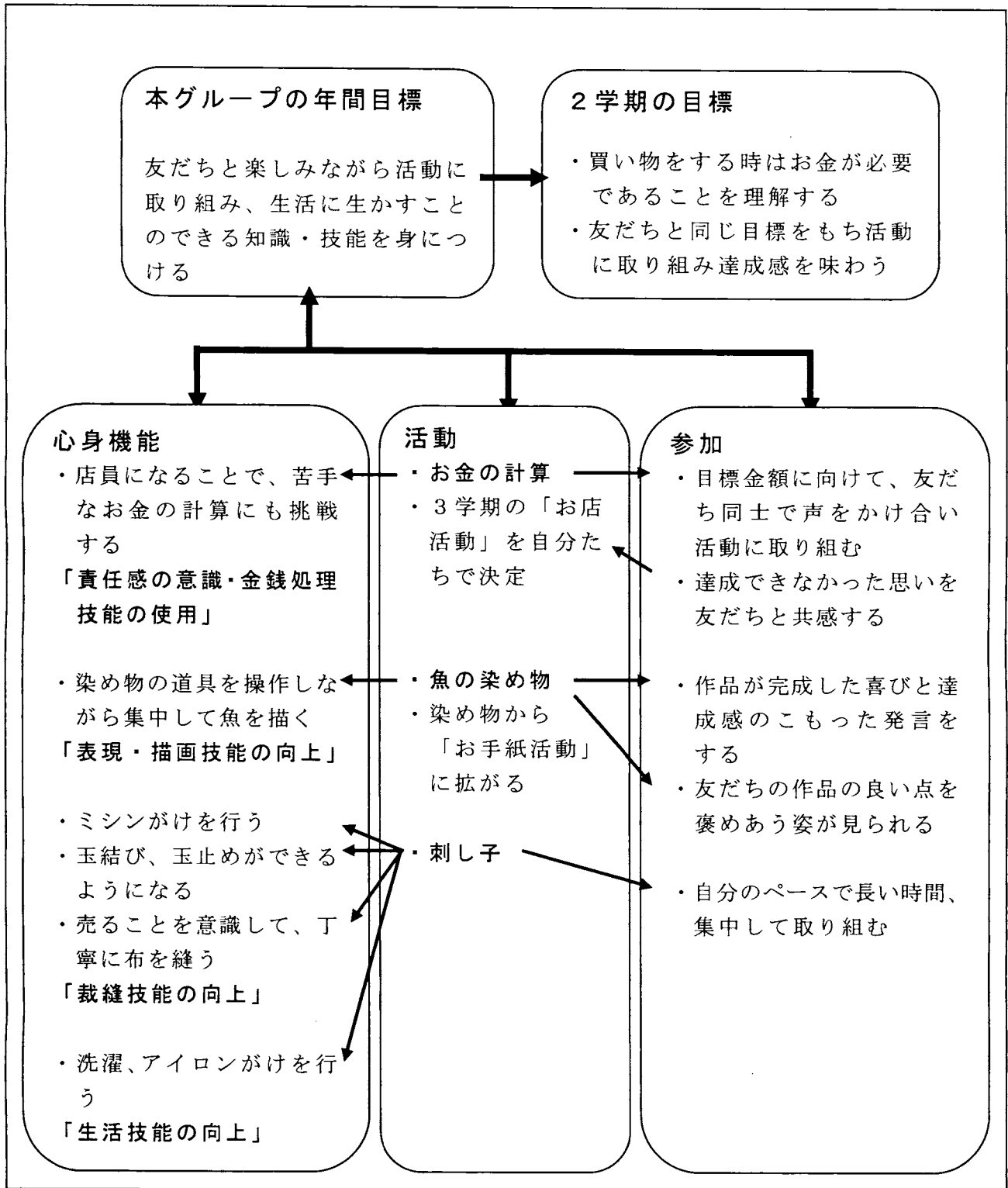


図 2 : 2 学期の生徒の実態